

『和漢朗詠集』 山井切と朗詠江注

惠 阪 友 紀 子

一、はじめに

山井切は、『新撰古筆名葉集』に、
弘誓院教家卿

山井切 朗詠哥二行書墨卦朱星アリ

とあり、伝称筆者を九条教家とする『和漢朗詠集』の断簡である。
九条教家は、鎌倉前期の公卿で、後京極良経の次男である。『新撰古筆名葉集』には、山井切のほか、「四半 新古今」「同 カナ法華」「同 歌合」「小四半 新古今」「六半 新古今」「巻物切 仏書」が挙げられるなど、能書家としても知られた人物である。

山井切としてよく知られるのは京都国立博物館蔵の国宝『藻塩草』所収のもので、その他には数葉が存するのみである。

詳細な詩題注記が見られるほか、朱点や墨点などが付され、異本の書き入れなどのある点が目される。

本稿では、この山井切の本文、詩題注記などから『和漢朗詠集』諸本の中での位置付けを試みる。

なお、『和漢朗詠集』の詩歌番号については、新潮日本古典集成『和漢朗詠集』（新潮社・一九八三年）に拠った。

二、伝教家筆の和漢朗詠集断簡

九条教家を伝称筆者とする『和漢朗詠集』の断簡は山井切の他にも次のようなものがある。（ ）内には、元の形状、縦寸、界線の有無、朱点・訓点などの書き入れについて記した。

『古筆学大成』¹

和漢朗詠集切(一)(卷子本、二十八・八センチ、

天地各二条、行間に界線、墨の調点、朱点)

和漢朗詠集切(二)(冊子本、二十二・六センチ、

界線なし、墨の調点)

『和漢朗詠集切集成』²⁾

三八 伝九条教家筆朗詠切(卷子本、二十九センチ、

天地各二条、行間に界線、墨の調点、朱点)

三九 伝九条教家筆朗詠切(冊子本か、二十四・三センチ、

界線なし、墨の調点、朱点)

四〇 伝九条教家筆朗詠切(卷子本か、二十九・三センチ、

天一条地二条、行間に界線、墨の調点、墨点、朱点)

春日井市道風記念館『和漢朗詠集の古筆』³⁾

21 伝九条教家筆 四半切(冊子本、二十一・七センチ、

界線なし、墨の調点)

42 伝九条教家筆 朗詠集切(卷子本か、三十一・四センチ、

天地各一条の界線、墨の調点、朱点か)

『平成新修古筆資料集』(第一集)⁴⁾

二〇 九条教家 山井切(和漢朗詠集)(卷子本、二十八・七

センチ、天地各一条、行間に界線、墨のカナ、墨

『倭文章文庫コレクション』⁵⁾

15 和漢朗詠集卷下断簡 山井切(卷子本、二十七・三七

センチ、天地各一条、行間に界線、朱点、調点、書

入注)

『古筆学大成』の(一)と『和漢朗詠集切集成』の三八、また『古

筆学大成』の(二)と『和漢朗詠集の古筆』の21は、紙の大き

さ、野線・調点などの特徴から、それぞれ、も同一の書から

切り出されたツレと思われる。同種のものがあるものの、教家

筆として少なくとも五、六種類が伝わっている。

『新撰古筆名葉集』にいう山井切は、歌が二行書きで、墨卦

が引かれ、朱点があるものであるが、この特徴とは複数種の断

簡が該当することになる。

この状況で、『藻塩草』⁶⁾所収の断簡を山井切とするのは、『藻

塩草』の付属目録に拠る。

『藻塩草』(古筆手鑑大成・第四卷)の解題に次のようにある。

この手鑑には通常の手鑑に見られる各古筆切ごとに筆者名等を判定した古筆家の極め札は貼られていない。その替りに、表裏ともに古筆切の貼付順に従って、筆者名・切名・筆者名の略歴を注した「手鑑表」「手鑑裏」と表題した『付

『属目録』二冊がある。…(略)…裏冊の奥書、

弘化四(丁未)年六月書之

了伴(花押)

によると、古筆本家第一〇世了伴(二七九〇—一八五二)の作成書写にかかわるものであることがわかる。

さらに、

この手鑑の了伴編『付属目録』からほぼ一〇年後に、古筆別家系の了伴によって、文化元年(一八〇四)版『古筆名葉集』を増補訂正した『増補古筆名葉集』が安政五年(一八五八)に刊行された(この明治一八年版が『新撰古筆名葉集』)。…(略)…『増補古筆名葉集』は、『藻塩草』の了伴編『付属目録』にほとんど拠っていると推定することが出来る。

とある。『新撰古筆名葉集』という山井切は『藻塩草』所収の切である。

三、山井切の書誌

『藻塩草』所収の断簡と比較して、その特徴からツレと判断されるのは次の五葉である。詩歌の配列順に挙げる。

①『古筆の楽しみ』(上巻・秋・紅葉)

縦二十七・五センチ、横二十・八センチ。

界間二十三・八センチ。

(極札) 九条殿教家卿(紅葉詩哥)(朝倉茂入印)

②『藻塩草』(下巻・饒別)

縦二十九センチ、横十五・七センチ。

界間二十三・八センチ。

③個人蔵(下巻・詠史)(図版参照)

縦二十九センチ、横十五・九センチ。

界間二十四センチ

(極札) 九条殿教家公(詠史)(呂鑒印)

④山内神社宝物資料館蔵『古筆手鑑』(下巻・述懐)

縦二十八・八センチ、六・〇センチ

(界間二十三・八センチ)

(極札) 古筆勘兵衛系印

⑤『古筆学大成』(巻三十・補遺、105)

それぞれの断簡の情報から総合して、山井切の書誌情報をまとめておく。

縦の大きさは約二十九センチで、もとはやや大型の卷子本。天地に薄墨界があり、界間は二十四センチほど。料紙は、斐

紙^①。②④には記述が見られないが、①③は薄く雲母が引かれて
いる。

①が上巻、②⑤が下巻の断簡であることから、もとは上下
巻そろいで書写されたもの。また、②『藻塩草』所収の断簡は、
六三三・六三四番の漢詩句と六四〇番の和歌であり、間が抜け
ている。『藻塩草』の解説には、

特に紙継ぎの跡はないが、「いのちたに」の和歌の前に、
他の伝本によれば、漢詩三首、和歌二首がさらに存するは
ずである。書写上の誤りか、あるいはもともと抄本なのか。
とあるが、①③⑤の断簡には詩歌の脱落はないことから、全体
を書写したもので、②は誤脱であろう。

漢詩は、七言詩二句を一行書き、和歌は、漢詩一行よりはや
や広めの幅に上句下句で分けて二行書き、和歌の二行目は半字
分ほど下げて書写されている。

朱点、声点（墨圈点）、墨で返り点、送り仮名などを付すほか、
異本書き入れも見られる。書き入れの墨色は異なるものもあり、
一度に書かれたものではない。①三〇一番の詩句には「千暮秋」、
⑤七七三番には「千无／五十五」との集付けの書き入れがある。

漢詩文句には詩題と作者名が、和歌には作者名が記される。
筆跡は、教家の自筆とは認められないが、鎌倉時代中期ごろ

に書写されたものと思われる。

四、本文の特徴

次に、山井切の本文の特徴を確認していく。

翻刻に際して、字体はなるべく表記通り、改行も元の通りと
した。ただし、読みやすさの点から、漢詩句は句ごとに一文字
分の空白を開けた。また、行末に細字で書き込まれた詩題・作
者の注記は（〜）に入れ、改行は／で示した。朱のヲコト点、
声点、返り点は紙面の都合上、省略した。それぞれの断簡につ
いて特筆すべきことは翻刻の後に＊を付けて注した。

翻刻の次には主な本文異同を掲げた（詩題、作者については
別で扱うこととし、ここでは詩歌本文のみの異同を掲げる）。
該当箇所には傍線を付した。諸本の異同は、国文学研究資料
館共同研究の研究報告『『和漢朗詠集』の伝本と本文享受の研
究^②』に拠った。

異同に用いた主な写本は次の通りである。（ ）内は略号。

○粘葉本系統

伝藤原行成筆粘葉本（粘葉本・粘）
伝藤原行成筆伊予本（伊予切・伊）

近衛本和漢抄（近衛本・近）（下巻のみ）

○関戸本系統

伝藤原行成筆関戸本（関戸本・関）

伝藤原行成筆雲紙本（雲紙本・雲）

○平安時代書写本

伝藤原公任筆卷子本（伝公任筆本・公）

世尊寺伊行筆葦手絵和漢朗詠抄（葦手絵本・葦）

藤原定頼筆山城切（山城切・山）

久松切（久松切・久）

○鎌倉時代以後書写本・朗詠江注を有する諸本

専修大学蔵建長三年本（建長本・建）

鳳来寺旧蔵藤原師英筆本（鳳来寺旧蔵本・鳳）

天理大学附属天理図書館蔵貞和本（貞和本・貞）

国立国会図書館蔵菅原長親書入本（長親本・長）

関西大学図書館蔵生田文庫本（生田本・生）

逸翁美術館蔵伝冷泉為秀筆本（伝為秀本・秀）

正安二年奥書本（正安本・正）（下巻のみ）

○その他

坂本龍門文庫蔵本（龍門文庫本・龍）

宮内庁書陵部蔵室町書写本（5031）（書陵部室町本・室）

①『古筆の楽しみ』（上巻・紅葉・301～306）¹³⁾

紅葉（付落葉）

301 不堪^{タカ}紅葉青苔地 又是涼風暮雨天（秋雨中贈／元九／白）

302 黄纈^{ワウケン}緜林^{エンリン}寒有葉 碧瑠璃水^{イキキョウジン}淨無風（泛大瀬／書下／白）

303 洞中清浅瑠璃水 庭上蕭疎錦繡林（翫池頭／紅葉／保胤）

304 外物獨醒^{サマ}松澗色 餘波^{ヨハ}合力錦江聲（山水唯／紅葉／以言）

305 しら露も時雨もいたくもるやまは
したはのこらすいろつきにけり 貫之

306 むら／＼のにしきとぞ見るさほやまの

は、そのもみちきりた、ぬまは 清正

*項目名「紅葉」の上に朱で「五十」とある。

*項目名「紅葉」の下の「付落葉」は墨色が異なる。

*二行目「不堪」の上に「千暮秋」と集付がある。

*五行目「餘波」の付訓は他の書入とは異墨異筆。

（異同）302 「風」（粘・伊・公・葦・久・鳳・貞・生・正）
↓「塵」（関・雲・山・建・長・秀・龍）

↓（損傷）（室）

303 「疎」↓「条」（粘・伊・山・長・龍）

② 『藻塩草』所収（下巻・餞別・633 634 640）
633 昔聚丹鳥 競寸陰於十五年之間 今

迎畫熊 欲分_ッ手於三百盃之後（山川千里別／順）

634 楊岐路滑 我之送人多年 李門波

高_シ 人之送我何日（餞諸岐人序／以言）

640 いのちたにこゝろにかなふものならは

なにかわかれのかなしかるへき 遊女

* 二行目「迎」の傍書「促」に「ウナカシ」の訓あり。

* 「諸」の下に文字（「別」か）あり。

（異同）配列 635 636 632 634 637 640（久）

633 640（その他諸本）

633 「迎」↓「促」（山・鳳・貞・龍・室）

「欲」↓ナシ（粘）

634 「我」↓「吾」（粘・近・伊・生）

「波」↓「浪」（粘・伊）

640 「かなしかるへき」

（葦・山・建・鳳・貞・長・秀・龍・）

↓「かなしからまし」（粘・近・伊・関・）

雲・公・久・生・正・室）

③ 個人蔵（下巻・詠史・693 696）

詠史

693 燈暗數行虞氏淚 夜深_ズ四面楚歌聲（項羽／橋相公）

694 賓鷹繫_シ書秋葉落 杜羊期_シ乳歲花空（蘇武／在昌）

695 他日_{ツイ}遂逃_ル秦虎口 暮年初謁漢龍顏（叔孫通／紀納言）

696 かそいろはいかにあはれとおもふらむ

みとせになりぬあした、すして 伊弉諾尊

* 四行目「遂」の付訓は他の書入とは異墨異筆。

（異同）694 「杜」（関）↓「牡」（公）

↓「牡」（その他諸本）

695 一首ナシ（生）

「他」↓「少」（粘・近・伊）

696 「かそいろは」↓「かそいろめ」（伊）

↓「かそいろも」（建）

↓「かそふるも」（秀）

④ 山内神社宝物資料館蔵『古筆手鑑』（下巻・述懐・751）

751 范蠡收責勾踐 乘扁舟於五湖 谷

犯謝罪文公 亦遙巡於河上（方望書文伝三／後漢書）

（異同）751 「勾」↓「句」（生）

⑤『古筆学大成』（卷三十・補遺）（下巻・祝・773〜776）

祝

773 嘉辰令月欲無極 万歳千秋樂未央（雑言「損傷」／謝偃）

774 長生殿裏春秋富 不老門前日月遲（天子万年／保胤）

775 わかきみは千よにやちよにさ、れいしの

いはほとなりてこけのむすまで 順

776 よろつよとみかさのやまそよはふなる

あめのしたこそたのしかるらし 中筭^勝

（異同）773 「嘉」↓「佳」（公・久）

「秋楽」↓「楽秋」（関）

774 「前」↓ナシ（公）

775 「わかきみは」↓「きみか代は」（長・室）

「やちよに」↓「まします」（関・雲・山・久）

「こけのむすまで」

↓「こけむすまでに」（関・雲）

776 一首朱筆補入（長）

「よと」↓「よをと」（関）

↓「よを」（生）

「やまそ」↓「やまに」（山・生）

「よはふなる」↓「いわふらし」（龍）

「たのしかるらし」

↓「のとけかるらし」（建）

↓「たのしかりけれ」（龍）

山井切の本文は、粘葉本、関戸本などの平安書写本とは対立し、建長本・鳳来寺旧蔵本などの鎌倉期以後に書写された本文の特徴と一致する。

例えば、①302「無風」は平安書写本のうち、粘葉本・伊予切・などと一致し、関戸本・雲紙本などは「無塵」とある（傍書については後述）。しかし、次の303「蕭疎」は関戸本・雲紙本などと一致し、「蕭条」とする粘葉本などとは対立する。また、断簡②640の結句「かなしかるへき」は、葦手絵本、山城切を除く平安書写本では「かなしからまし」とある。何れの場合にも建長本・鳳来寺旧蔵本などと一致し、鎌倉期以後に書写された諸本の本文と共通する。

次に、作者・詩題表記について見ていく。作者名に異同があるのは次の通りである。なお、伝公任筆本は詩題・作者が一切記されないため、異同の掲出は省略する。

まずは和歌の作者・歌題を挙げる。

② 640 「遊女」(龍・室) ↓ 「遊女白目」(関・雲・山)

↓ 「遊女白女」(葦・久・建・鳳・貞・秀・生)

↓ ナシ (粘・近・伊)

③ 696 「伊弉諾尊」

↓ ナシ (粘・近・伊・建・長・生・正・龍・室)

作者ナシ(山) ↓ 「江相公」(粘・近・伊・久・鳳・貞・長・生・正)

↓ 「江」関・雲・葦

↓ 「後江相公」建

⑤ 775 「順」 ↓ 「中務」(建)

↓ ナシ (その他諸本)

776 「仲筭」^券 ↓ 「中算」(山・久・生・正・室)

↓ 「仲算」(鳳・貞・長)

↓ 「忠峯」(龍)

↓ ナシ (粘・近・伊・関・雲・建・秀)

② 640 の作者は「遊女白女(白目)」とあるところ、「遊女」のみある。③ 696 には「伊弉諾尊」とあり、山井切では作者名のように見えるが、他本では作者名は「江相公」「江」「後江相公」などであり、大江朝綱の歌とし、「伊弉諾尊」は歌題である。このように、やや正確性に欠ける表記がなされている。

640 の作者を「遊女」⑤ 775 の作者「順」とするのは、坂本龍門文庫蔵本・書陵部蔵室町書写本のみであり、この点は注目される。

776 の作者の「筭」は「算」の異体字で、鳳来寺旧蔵本などと一致する。「筭」の異本書き入れに「務イ」とあるのは、山井切独自のものではなく、鳳来寺旧蔵本、貞和本などにも見られる書き入れである。作者名を「中務」とするものは、鎌倉時代末〜南北朝期に書写された今治市河野美術館蔵伝世尊寺行忠筆本、同久我長通筆本、蓬左文庫蔵伝二条為重筆本などがある。

和歌の作者・歌題の表記についても、概ね鳳来寺旧蔵本・貞和本と一致する。先に述べた通り龍門文庫本・書陵部室町写本とは特に共通する。

では、最後に漢詩文句の詩題・作者名について見ておく。

① 301 「秋雨中贈元九」(建・鳳・貞)

↓ 「秋雨中贈元古」(龍)

↓ ナシ (その他諸本)

302 「泛大瀬書下」

↓ 「泛大湖書事寄微之」(建・鳳・貞)

↓ 「泛大湖書事」(龍)

↓ ナシ (その他諸本)

「白」↓「同」関・雲・葦・山

↓「損傷」(室)

303 「翫池頭紅葉」(建・鳳・貞・正・龍)

↓「山水唯紅葉イ」(生)

↓ナシ(粘・伊・関・雲・葦・山・久・長・秀・

正・室)

「保胤」↓「慶保胤」(正)

304 「山水唯紅葉」(雲・山・久・建・鳳・貞・生・正・龍)

↓ナシ(粘・伊・関・葦・秀・室)

② 633 「山川千里別

↓「山川千里別序」(建・秀)

↓「山河千里別序」(鳳・貞・生・龍)

↓ナシ(粘・近・伊・関・雲・葦・山・久・長・

正・室)

「順」↓「源順」(建) ↓ナシ(粘)

634 「餞諸岐人序」↓「餞諸故人序」(粘・近・伊)

↓「於鴻臚館餞北客」(鳳・貞・生・龍)

↓「於鴻臚館北客餞」(秀)

↓「餞北客」(建)

↓ナシ(雲・雲・葦・山・久・長・正・室)

「以言」↓「江以言」(建)

③ 693 「項羽」(雲補・関・鳳・貞・久・秀・龍)

↓「項洲」(山)

↓「得項羽」(生)

↓ナシ(粘・近・伊・雲・葦・建・正・長・室)

「橋相公」↓「橋贈納言／橋相公」(鳳・貞)

↓「橋贈納言」久・建

694 「蘇武」

↓ナシ(粘・近・伊・雲・葦・建・長・正・室)

「在昌」↓「紀在昌」(久・鳳・貞・龍・室)

↓「紀納言」(建)

695 「叔孫通」↓ナシ(粘・葦・長・生・正・室)

「紀」↓「紀納言」(久・建・鳳・貞・秀・龍)

↓ナシ(生)

④ 751 「方望書文伝三／後漢書」

↓「後漢書／方望書文伝三」(龍)

↓「後漢書／魏囂伝／方望書文伝第三」(鳳・貞)

↓「同／方望書文／伝三」(建)

↓「後漢書」(粘・近・伊・葦・正・長)

↓「同(後漢書)」(関・雲・久・生・室)

↓「同上（後漢書）」（山）

↓「同前（後漢書）」（秀）

⑤ 773 「雜言」〔損傷〕

↓「雜言詩」（建・鳳・貞・龍）

↓ナシ（その他諸本）

「謝偃」↓ナシ（雲・秀）

774 「天子万年」（山補・建・鳳・貞・秀・生・龍）

↓ナシ（その他諸本）

漢詩文句の詩題注記は、建長本・鳳来寺旧蔵本・貞和本・龍門文庫本などと近い。これらの写本は大江匡房の注、いわゆる「朗詠江注」を有する伝本である。その中でも特に鳳来寺旧蔵本・貞和本・龍門文庫本との一致が目される。

詩題以外の書き入れもこれらの諸本と一致している。断簡① 302本文「風」の傍書に「塵」とあるが、この傍書は、建長本・鳳来寺旧蔵本・貞和本・生田文庫本にも見られる。また、② 633の本文「迎」の傍書「促」も同様である。鳳来寺旧蔵本・貞和本では「^建促」¹⁵、為秀本「^建迎」、龍門文庫本は「^建促」、傍書の「^建迎イ」のさらに左に「^建促」と書き加える。長親本も「^建迎」（「^建迎」ミセケチ）とし、さらに「^建迎（江）」とある。¹⁶

これらの例から考えるに、異本校合は個別に行われたもので

はなく、異本書き入れも含めて江注として書写されたものであると考えられる。

さらに、断簡① 301の行頭「千暮秋」、断簡⑤ 773の行頭「千无／五十五」は、それぞれ『千載佳句』での所収状況を示したもののだが、これらは鳳来寺旧蔵本などにもみえるものである。ただ、鳳来寺旧蔵本などでは、302にも「千初冬」とあるが、山井切にはない。¹⁷

ところで、山井切の詩題注記のうち、朗詠江注とは一致しないものが一つある。断簡② 634の「餞諸岐人序」であるが、これは鳳来寺旧蔵本などには「於鴻臚館餞北客」とあるもので、この詩句は『本朝文粹』（巻九・詩序二）に所収の大江以言「暮春、於三文章院、餞三諸故人赴任、同賦別路花飛白」から抜き出したものである。山井切と近い詩題としては、粘葉本系統の「餞諸故人序」である。おそらく、本来は「故人」とあるものを山井切が誤写したものである。

粘葉本系統の三本とのみ一致する点には注意すべきであろうが、これ以外に粘葉本との関係を示す本文は見られない。

五、おわりに

現存する山井切の五葉には、異本注記以外の朗詠江注は確認できないが、⁽¹⁸⁾詩題の注記、異本書き入れ、集付けなどが共通することから、山井切は朗詠江注と関係のある伝本と見てよいだろう。

山井切は鎌倉時代中期頃の書写と目され、朗詠江注に關係する写本としては古いものである。わずかな本文が確認されるのみであるが、朗詠江注の享受を考える上では無視できない本文である。

付記：本研究はJSPS 科研費 16K02382 の助成を受けたものです。

(注)

- (1) 小松茂美『古筆学大成』第十五卷、和漢朗詠集 三(講談社、一九九〇年)
- (2) 久曾神昇『和漢朗詠集切集成』(汲古書院・一九九八年)
- (3) 『和漢朗詠集の古筆』(春日井市道風記念館・一九九八年)
- (4) 田中登『平成新修古筆資料集』第一集(思文閣出版・

二〇〇〇年)。山井切と紹介されるが、行間にも界線があることから別種の切である。

(5) 『倭文亭文庫コレクション—古書画との出会い—』(茶道資料館、一九九七年)。山井切とあるが、縦の大きさ、界線の状態から別種の切であろう。

(6) 古筆手鑑大成編集委員会『古筆手鑑大成』第四卷・藻塩草(京都国立博物館蔵・角川書店・一九八五年、橋本不美男解題)

(7) 他の断簡に比して縦が一・五センチほど短い、これは天地の余白部分が切り落とされているためである。

(8) 徳満澄雄「山内神社宝物資料館蔵『古筆手鑑』(甲)について〈前承〉」(『高知女子大学紀要・人文・社会科学』第三十四号、一九八六年)の翻刻・解題による。解説に、『藻塩草』の山内切と比較して、「紙の長さ、天地間の高さ(墨野)、筆跡の特徴、校合の有無、返り点、声点を付していること、紙質において、それと本断簡とは合致する」とある。

(9) 注8の解説には、界間の具体的な数字はあげられていないが、「天地間の高さ(墨野)」も『藻塩草』と合致するとの記述から判断しておく。

(10) 図版のみ掲載のため、大きさなどは不明。

- (11) 注8の解説には、「楮まじり雁皮紙」とある。
- (12) 国文学研究資料館・共同研究（特定研究（若手））研究成果報告『和漢朗詠集』の伝本と本文享受の研究』（研究代表者・恵阪友紀子、二〇一八年）
- (13) 田中登『古筆の楽しみ』（武蔵野書院・二〇一五年）
- (14) この書き入れは、朗詠江注以外にも伊予切「風」、雲紙本「塵」などのようにある。
- (15) 傍書の「迎（江）」の「江」は大江匡房が所持していた伝本（江本）を指す。
- (16) この書き入れは山城切にも「促」のように見える。
- (17) 朗詠江注を有する、関西大学図書館蔵伝世尊寺行尹筆本でも、集付けの数は鳳来寺旧蔵本と比較してかなり少ない。
- (18) 鳳来寺旧蔵本では、断簡①304の次に「故橋工部（孝親）被語曰……」、断簡③696の行頭に「賀祖、父也／伊呂波、母也」、行間に「朝綱日本紀詠史……」との注があるが、山井切には見えない。

（えさか ゆきこ）／京都精華大学特任講師

〈図版資料〉 山井切③

